



下仁田戦争感想録

舊高崎藩士  
石原應恒

K242  
5  
□

K263



K263  
6

下仁田戦争感想録

目次

緒言  
戦術と兵器との關係  
野州出兵並に水戸那珂港の攻撃



高崎在城の藩兵出動下仁田附近に於ける戦闘

餘録

- 一、指揮權
- 二、甲冑
- 三、兵器の素質
- 四、戦闘教練
- 及其他
- 五、戦士の餘榮

附圖

- 下仁田戦争一般圖
- 下仁田戰場略圖

下仁田戦争感想録



緒言

昭和八年十一月十六日、下仁田役の戦死者七十周年の祭典を管理者里見昇遺族總代小泉金次郎兩氏の主宰により、盛大に舉行された。東京からは舊高崎藩主大河内家の御代拜を首

陸軍少將 石原應恒述

め、遺族等四、五輩と共に、予も亦同地に赴き其式場に臨み峻嚴なる祭典に参列したることは、誠に光榮とする所であつた。其實況に就ては既に『扇光』第五號に掲載した通りである。又里見邸に於ては、鄭重なる宴會が催され、高崎より出席の遺族並に温故會々員七十餘名と共に、予も亦大いに歡待

せられたのは感謝の至りであつた。此時其席上で主宰者から當時行はれた戦闘の状況に就て、一席の講話を予に所望された。然るに此戦記は既に故深井景員君並に故齋藤平治郎君等の著書あり、一般諸彦の周知せられる所、再び喋々するまでもなく、且つ予等の歸還發車時刻も迫りあることゝて、極めて簡単に戦闘の経過を述べたに過ぎなかつた。

今回は之を感想録と題し、其行動も今日の戦術上の見地から見て、聊か研究を試みようと思ふのである。然るに此戦闘行動たるや、我々の先輩が、寡兵を以て優勢の敵に對し、粉骨碎身、勇猛果敢、國家の爲に能く武士の本分を盡されたものであつて、衷心敬服して止まざる所、今其英靈に對して、後輩たる予が、漫りに批評を加へるが如きは、甚だ恐懼する次第である。併し今日邦家の非常時に於て、在郷軍人並に青年訓練所青少年諸君の、修養上の參考にもと思ひ、茲に敢て稿を草した所以である。此戦闘の際予は十五歳の少年で定府住居(江戸詰め)であつたが、好んで此實戰談を同藩の先輩から聞き、之を楽しみとして居つた。然るに早くも七十年の昔となり、今坐ろに當時を回顧し、激戦の跡を偲ばんとする、之を他山の石とし、以て玉を磨く一助ともならば本懐の至りである。以上須らく諸彦の諒解を得れば幸である。(昭和九年五月、八十五歳を迎へて。)

浦賀に來り、通商貿易を請ふた。是に於て泰平の夢は破れ、國家多事多難物議騒然とした。然るに水戸藩は、元來尊皇主義の者多く、その爲米國軍艦來るや、攘夷論沸騰し、其形勢頗る熾んであつた。適々藩主烈公薨去し、爾來藩論二派に分れて内訌烈しく、互ひに確執して降らず、遂に干戈に訴ふるに至り、常陸、下野の二州は騷亂の地となつた。之を鎮壓するため、元治元年六月十一日、幕府から我が高崎藩及び其他の諸藩へ出兵の命令が下つた。是に於て我が主君は、在府の士卒を從へて高崎へ歸り、老臣の率ある二隊を編成し、同月二十五日在城の老臣長坂忠恕が士大將となり、大砲三門、士卒約一千餘人(若黨鎗持等を含む)を指揮し、野州小山方面に向つて、整々堂々と出陣した。翌二十六日在府の老臣田中正精は、在府の士卒を以て編成したる一隊の士大將となり、右と略ぼ同様の兵力を以て、長坂隊の跡を追跡し、同じく小山に向ひ進發した。此出陣には兩隊共甲冑を用ひず、陣笠、野袴の軽い出で立ちであつた。幸ひにも大平山屯集の賊徒等は忽ち鎮靜したので、出先きの幕吏より諸隊引揚の令があつた。此行動日数は、出發から歸還迄僅に三週日に過ぎず、又何等特記すべき功績もなく歸城したのであつた。

予は思ふに、賊徒は大平山は引き去つたが、全く鎮靜したのでなく、一時踪跡を暗まし、單に他に移動したのみであ

## 戦術と兵器との關係

茲に當時の戦況を披瀝するに先ち一言したきは、戦術と兵器との關係である。戦術は兵器の良否、火器の進歩等に依て大なる影響あることは、こゝに論ずるまでもない。此戦闘に於ける彼我の兵器は、概ね甲乙なきが如し、我藩の戦士は特に全部甲冑を着し、昔の武士の武裝と全く同じであつた。察するに當時地形の利用など眼中になく、足輕は小銃射撃にて敵を制壓し、戦士は鎗を揮つて敵陣に突入せんとしたものの如く、事實突進深入りした者さへあつたのである。然るに敵は先づ地の利を占め、輕舉突進を避け、専ら銃砲等の火力を以て、勝利を得んと努めたやうであつた。是れ彼等は、此時迄に常野の實戰に於て、多少の經驗を體得したものと思惟せらる。予が言はんと欲する所は、今日の新兵器による新戦術との比較ではなく、彼我共に用ひたる當時の儘の兵器を以ての戦闘に就て論ぜんとするのである。又戦場の地形には格別の變化なく、現今參謀本部出版の五萬分一の高崎、富岡の二枚の地圖あらば、研究に事足りるのである。

## 野州出兵並に水戸那珂港の攻撃

嘉永六年六月、米國水師提督波理が軍艦四隻を率ゐ、突然

つたが、幕吏の偵察、判斷共に當を得ず、認識不足且つ其措置の輕卒なるに基因して斯の如き狀況を招來したのであつた。

然るに同年七月二十九日、水戸藩の騷擾は更に倍々擴大したので、水藩の後援として、幕府から再び出兵の令が下つた野州から引揚げて、未だ一箇月ならざるに、再度の出動命令である。今回は、我が藩は水戸東南の那珂港を目標として、銚子方面から前進することになつた。

是に於て高崎、東京、銚子の三ヶ所の士卒を銚子の陣屋に集合して二隊に編成し、番頭深井資信、同宮部義虎を各々其長となし、在城の老臣津田次幹が士大將となり、之を指揮して進發し、水路利根川を溯り、潮來を經、途中賊徒を驅逐しつゝ、水戸南方に進んだ。そこで那珂川を隔て、港及び反射爐の敵に對し、包圍攻撃を行ひ、約四十日間砲戰が続いた。

十月二十三日幕軍は大舉して、反射爐を目標に總攻撃を行ひ、此敵を掃蕩した。此方面の敵は降伏者千二百餘名あり、好結果を以て終局を結んだ。當時幕軍の總勢は、次の十二藩の諸隊の集成軍であつた。

幕府の歩兵二大隊

同 騎兵若干隊

幕府の砲兵若干隊

水戸藩	徳川中納言 三十五萬石	忍藩	松平下總守 拾萬石
佐倉藩	堀田相模守 拾一萬石	二本松藩	丹羽左京大夫 拾萬七千七百石
新發田藩	溝口主膳正 五萬石	高崎藩	松平右京亮 八萬二千石
宇都宮藩	戸田越前守 七萬七千八百石	棚倉藩	松平周防守 六萬四百石
關宿藩	久世謙吉 五萬八千石	壬生藩	鳥井丹波守 三萬石
福島藩	板倉内膳正 三萬石	磐城平藩	安藤隣之助 五萬石

然るに港方面を據守して居た敵は、水戸の正黨武田耕雲齋で、兵約一千餘と、大砲十五門とを有つてゐた。彼等は其西北方の重圍を突破し、幕軍の追撃を屢々拒止しつゝ、奥州棚倉街道に出で、部隊としての踪跡を暗まし、幕軍と全く離隔してしまつた、其後彼等は野州の山野を潜行し、約十數日を経て上毛の地に其姿を現はした。此間各地の民家で、金品穀類を募り、馬匹を徵發した。其數乘馬百五十、駄馬五十頭の多きに達したと傳へられてゐる。

予は思ふに、當時幕軍がもしも追撃の手を緩めず、右十二藩中の有力なる藩兵を選び、之に幕府の歩砲兵隊を加へ、

一層果敢に追撃したならば、恐らく利根川渡過前に於て戦局を結んだであらう。然るに幕府の當局者が、怠慢踴躍その好機を失ひ、遂に長蛇を野に逸し、倍々敵軍の勢力を増大せしめ、途中の小藩を苦しむるに至つたのは、返すくも遺憾であつた。

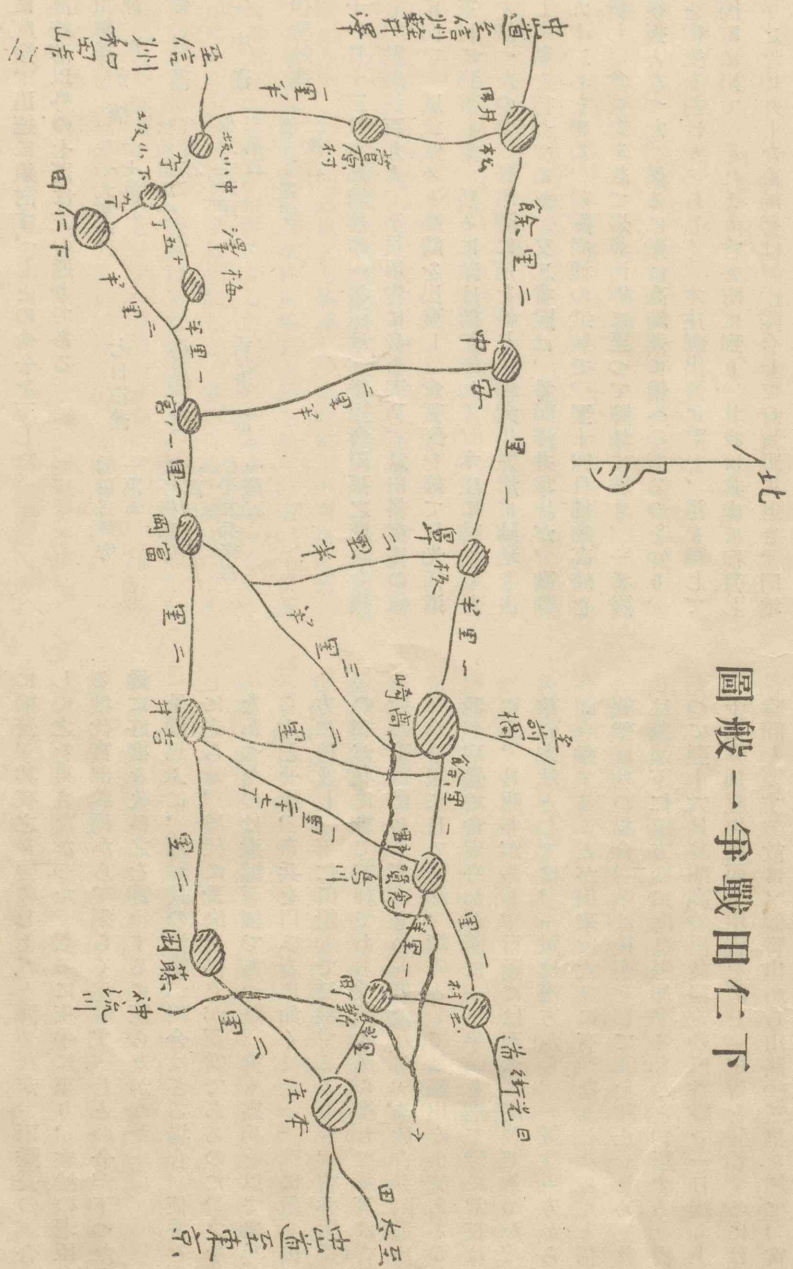
而して武田耕雲齋の目的(當時幕吏並に沿道の諸藩は此目的を知らなかつた)は、京都に上り一橋慶喜公に謁し、以て哀情を訴へ正邪の裁斷を仰がんとしたのであつた。此隊は同年十一月十日上州太田町に現はれ、二日間同地に滞在し、大ひに諸準備を整へ、十二日軍令正しく旗鼓堂々として太田町を出發し、利根の大河を故障なく渡過し、同日夜は其左岸の島村及び其附近に宿營、翌十三日拂曉島村を出發し、中山道に出で、夫れより本庄驛に至つて宿營し、翌十四日同地を出發の際、道を南上州に轉じ、藤岡町に向つて前進した。

(一般圖參照)

高崎在城の藩兵出動下仁田附近に於ける戦闘

元治元年十一月十二日、幕府の出先き若年寄田沼玄蕃頭は武田耕雲齋討伐の爲、高崎藩主並に他の七藩に對し、人數を速に差出し、領分は勿論他領迄へも出張、最寄々々申合せ、相

圖般一爭戰田仁下



互に應援、迅速に追討すべしとの命令を下した。高崎藩以外の七藩は左の通りである。

川越藩	前田丹後守	七日市藩	一萬石
陣屋	十七萬石	小幡藩	松平攝津守
館林藩	秋元但馬守	一萬石	
安中藩	板倉主計頭	吉井藩	松平左兵衛督
	三萬石	一萬石	
伊勢崎藩	酒井下野守		
	二萬石		

十一月十三日夜高崎藩の一番隊は、番頭會田孫之進之を指揮し、戰鬥員百九人、全員甲冑に身を固め、武田耕雲齋の軍勢に向ひ、威武堂々と高崎を出發し、倉賀野を経て日光街道の玉村に到着した。然るに敵は前記の如く、本庄に轉進したのを知つたので、新町驛に道を轉じ、神流川左岸に陣地を占領して敵を待つてゐた。又二番隊は、番頭淺井隼馬が、戰鬥員九十二名を率ゐ、前隊同様の武裝で、翌十四日拂曉高崎を出發し、倉賀野を経て岩鼻河原に至つて陣地に着き、一番隊の後援となつた。然るに敵は高崎藩に備へのあるのを知り、之と衝突を避けたるらしく、本庄驛出發に際し、道を轉じて藤岡町に出で、それより吉井町に到り、其夜は其處に宿營した。之を偵知した高崎勢は、兩隊合して倉賀野に退き、同地

に宿營、其夜之を襲撃しようと思つたが、兩隊長の議合はずして之を果さなかつた。然るに夜半に至り、在城の老臣である城代官部義種から、須らく追撃すべしとの令が下つたが、遂に好機を失ひ之を實行するに至らなかつた。

予は思ふに、兩隊長の協議が相合はざる場合、使番を高崎に走らせ、城代に裁決を仰ぐが至當であるのに、之を爲さなかつたのは遺憾至極であつた。抑も寡兵を以て衆兵を破らんとせば、奇兵を用ひるに如くはない。殊に敵を山岳地方に迫及し、下仁田附近で交戦するよりも、吉井附近は地の利が我に於て有利である。此點から推して勝算は吉井附近の戰鬥に多くあるものと思はれる。全体吉井附近は、周圍が平坦にして開闊、障得としては鍋川なべがわの小流あるのみで我が宿營地倉賀野から僅に一里半餘を隔て殊に當夜は幸ひにも、月明りがあり、行動には至つて便利であつた。其襲撃の方法としては、一隊は南方から、一隊は東方から、二面合撃することが出来、大ひに有利なりしならんと信ず。襲撃成功の場合、敵は後衛をして我を防止せしめ、其本隊は急遽下仁田方面に向ひ退却するものと判断するを得、よつて翌十六日黎明高崎出發豫定の三番隊を一日繰り上げ、十五日拂曉出發而も甲冑を廢し（甲冑を裝着するには、長時間を要する故に）、觀音山から山路約三里を経て、富岡町

の東方に向ひ急進させ、伏兵として之を其地に潛匿し、以て敵の退却を側面から襲撃させたらば、勝算我にあることを疑はない。

緒十一月十五日拂曉、會田、淺井の兩隊は、逐次倉賀野を出發し、隊列勇ましく吉井、富岡等敵の蹤跡を追ひ、黄昏時に一ノ宮に達した。小幡藩、七日市藩の兵も、丁度其處に會合したので、こゝに軍議を開くことになつた。此會議の結果高崎藩が先鋒となり、小幡、七日市兩藩は、兵員兵器不足のためとて先鋒を辭退し、敵の後尾を襲撃することを約束した。

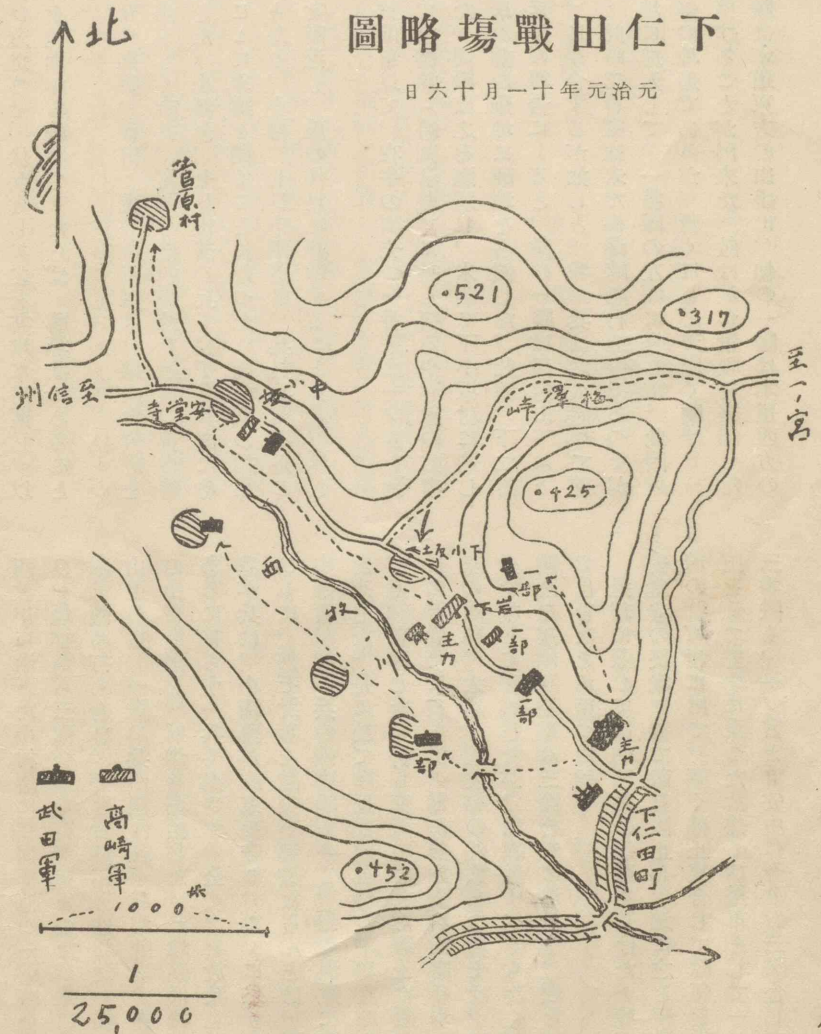
同夜々襲の目的を以て、夜半の頃先づ一番隊は一ノ宮を發し、蕭々として梅澤峠（略圖參照）に差し掛るや、敵の前哨部隊に衝突した。同隊は之を驅逐し、未明に下小坂村に達し岩下の里見昇氏邸前の畑地に陣地を占領した。此頃、下仁田方面に出した斥候の報告によると、敵の一隊は伊勢山下（下仁田町の北方）に集合するが如しと。我が兵は之に向つて砲撃を開始した。此時二番隊は未だ梅澤峠を行進中であつたが鋭意急進、陣地に進入して、一番隊の左側に合した。此附近は彼我共に未知の地形であるが、暫くにして天漸く明け、一帶の地形を展望することが出来た。敵は我が策戦を察知したらしく、其一隊は本道東方の山手に、他の一隊は本道西方の

西牧川に沿ふた小村落に、尙ほ他の一隊は全く我が正面に向ひ、最初から三面合撃の姿勢をとつた。是に於て先づ正面の隊で漸時打ち合ひ、突き合ひが行はれた。然るに此頃東方の山上から、一隊の兵が現はれ、我が陣地の左側前方岩下の上の山に進出し、射撃を開始した。此地點は我が陣地の要點であるに拘らず一兵も出さず、全く之を放棄して置いた。初め我が兵は、小幡藩が約束を守り、こゝに來り合せたものと思ひしに、何ぞ計らん敵の一部隊ならんとは。而も距離近く命中確實、我が兵の損害頗る多く、忽ち混亂に陥り、隊伍動搖を來した。是に於て隊長は、戰勢の不利なるを察し、一と先づ退却を命じた。併し交戦中の我が戰士は殺氣天に冲し、隊長の音聲耳に入らず、爲に其意圖は徹底せず、中にも勇敢無双の内藤、大島、國友等の外數名の勇士は、突進又突進、死力を竭して奮戦したが、衆寡敵すべくもなく、何れも天晴な戦死を遂げ、全軍は三面合撃に堪へず、涙を吞んで遂に退却の已むなきに至つた。

退却に際しては勿論敵の追撃を受けた。我が隊は中小坂村安堂寺の民家に據て敵を阻止し、遂に之を撃退し、妙義山南麓の菅原村に出で、漸く停止集合して隊伍を整頓し、後松井田を経て安中に至つた。然るに援軍として一ノ宮迄到着した三番隊も、一ノ宮より安中に至り、三隊合して再び敵兵の追

# 下仁田戰場略圖

元治元年十一月十六日



撃を謀つたが、高崎の城代から引揚命令が来たので之を止め同地に一泊の上、翌日高崎に歸城した。此戦闘は拂曉に始まり、約三時間で終結したと言はれ、尙ほ當日の戦死者は次の三十六名であつた。

戦死者

- |    |    |       |    |    |     |
|----|----|-------|----|----|-----|
| 使番 | 二人 | 大砲差圖役 | 一人 | 戰士 | 拾六人 |
| 徒士 | 五人 | 醫師    | 二人 | 足輕 | 六人  |
| 從卒 | 四人 |       |    |    |     |

計 參拾六人 外に負傷者拾六人

予は思ふに、此戦闘は最初から、勝算の寡なかつたことは明瞭である。其理由としては

第一 敵の兵力は我の四倍餘に當り、且つ何れも實戦の経験ある武士のみであつた。我が軍は全く之に反し、藩士の精銳は水戸那珂港方面に出勤して、未だ歸還しないので、城兵纔に六、七百に過ぎず、之を分けて四隊となし、其一隊を以て城を守り、他を三隊に編成して出兵に充てた。故に老若混成の隊伍は洵に已むなき次第であつた。又三番隊は十六日朝高崎を發し、一ノ宮に到着の頃、最早戦闘は終つてゐた。縱へ三番隊が間に合つた所で、敵は優勢である之に對して決戦を爲すが如きは、素より不合理の誹を免れなく。故に一ノ宮に於ける軍議は最も重大な事件であつた

之を要するに當時敵情判断を誤りたる結果、斯の如き決心を爲すに至つたものと思ふ。孫子は「不知彼不知己者每戰必敗」と教へて居る。結局能く彼の情況を知悉せずして、徒らに行軍中に於ける足痛患者や、落伍者の一部を見ただけで、彼を侮り、又我が三番隊が當朝高崎を發し、援軍として來る筈にも拘らず、之を無視して最初から優勢なる敵に對し獨力を以て決戦の態度に出たのは、正しく情況判断を誤り、思慮を盡さざる結果であると斷言するも敢て過言ではあるまい。

第二 我が軍の任務としては、倉賀野宿營の際、夜半に至り、須らく敵を追撃せよと言ふ簡単な命令が城代から來たが、遂に實行が出来なかつた。抑も高崎城出發前には、近隣の諸藩と協同して、他領迄も進入し、之を討伐すべしとの意味であつた。然るに吉井に宿營した敵を夜襲しなかつたのは、兩隊長の議合はざるためであつた。尙ほ其理由となる所を聞知するに、其夜襲は吉井藩に對し、善隣の親みを失ふとの意見が出で、遂に之を中止するに至つたといふ此議論は武士道の見地から見れば、當然のことではあるが苟くも戦陣に臨んでは、勝敗は國家の安危、藩主の名譽に關するを以て、斯る場合に於ては、人道的の顧慮を主とする能はず、殊に奇襲にあつては尙更のことである。予は此

際中止説には不賛成である。又夜襲に於ては、同士討ちを避くる爲め、多くは鐵砲の發射を禁ずるに依り、人民は戸外に出でざれば、敢て危険の恐れなしと思ふ。

さて近隣の諸藩とは云へ、前橋や安中藩は來さうになく、小幡と七日市の二藩は、合同したが、敢て頼むに足らず、獨り我が三番隊のみが、此際最も有力な援軍である。殊に其兵員も百三十餘人であるから、之が参加すれば、總勢三百餘りとなり、必ずしも勝算なきにあらずである。さすれば此場合の策戦は如何にするか曰く、第三番隊來着迄決戦を避け、待機陣地に據つて持久戦を爲すが至當であると信する。而して此決心に基き、梅澤峠附近で、敵に對して側面陣地を選び、戦士は皆銃を執り、火力を以て戦鬪を交ゆれば、敵は之を棄て置いて、信州路へ進入することは出来ない。必ず攻撃し來るであらふ。斯くて第三番隊が到着するまで、此陣地を保持し、敵兵退却の色あれば、機を失せず攻撃に轉ずる等、臨機應變の行動に出で、成るべく永く敵を引き付け、決戦を行はずして敵を苦しめ、友軍参加せば攻勢に轉じ、彼の後尾より追撃を行ひ、以て能ふ限りの損害を與ふれば、我が任務に對し、全勝を得るに至らざるも、相當の效果あるものと信す。孫子曰く『兵者詭道也』と、此格言は古今を通じて變化なし、元來戦士は眞面目に

我が指揮の下に小幡、七日市の二藩をして當らしむるのを適當とする。

そこで一ノ宮軍議の結果、指揮官の決心左の如くなるを至當と信する。

#### 指揮官の決心

下仁田の敵に對し、梅澤峠附近に待機陣地を占領し、友軍の來着を待ちて攻撃に轉ぜんとす。

戦鬪の經過は、既に叙述した通りであるが、此役に使用した兵器と、此時代に於ける武士の教育とは、今日の情況と比較して、格段の差異あるは勿論である、故に單に以上の記事のみにては、十分に意味の徹底しない所がありはせぬかと思ひ、之を補足するため、餘録として次の數項を記載する。

#### 餘 録

##### 一、指揮 權

兩隊合したときは、高級古參者が責任を以て指揮者となることは、今日我が陸軍の極りである。然るに此役では、二隊長の協議によつて事を決行せしやに見ゆ、即ち吉井の夜襲議合はずして果さずと記載しあるは、統一の指揮者がなかつた結果ではあるまいか。元來我が高崎藩にても、番頭の指揮す

奮闘するが本義であるが、戦陣に臨みては、詭道の一語は正に味ふべき至言である、また予の計算によれば、三番隊が甲冑を廢止し、未明前即ち三時に高崎發するものとして山路を経て一ノ宮に出で戦地に急行すれば、里程は約六里であるから、遅くも午前九時迄には到着し得るならん。此隊が甲冑を着け、普通の速力で行進したのでは、十時迄に到着し得るや否や疑問である。之を指揮する隊長の果斷により、甲冑装着を廢めれば、縦へ急行軍を行ふも、戰場に到着後、尙ほ戦鬪に堪ゆる餘力あるものと信するのであるこれ等は何れも戦術上肝要なる研究問題である。又待機陣地に據つて持久戦鬪を行ふには、智識の最善を盡し、午前九時迄は是非とも踏張らねばならぬ。之につき如何にせば可なるやは、是又大ひに研究を要する點であるが、先づ現地に就きて地形を見渡し、防禦陣地の位置を定め、餘裕あらば樹木を伐採して射界を擴大し、又敵の近接を阻止する爲め、伐採の樹木を陣地前に配列して鹿砦となし、以て陣地を堅固にする。此工事には鎗持、若黨等を使役する、彼等を集むれば約百名に達す。彼等は各々帶刀しあるを以て之を利用して伐木をするを得、併し之を以て防禦力十分なりとは思はないが、此際之より以上の名案なかるべく、又此陣地は背後に迂迴せられる恐れあり、北方面の防禦には

る二隊以上の場合、老臣が士大將となつて、指揮を執る筈になつてゐる。然るに當時此措置に出なかつたのは、老臣長坂忠恕が、主君の命に依つて上府中、之を欠いたといふことが『高崎藩近世史略』に記してある。さればとて、城代が城を明けて、出馬することも出来ず、ここに大切な士大將を欠きしことは、甚だ遺憾であつた。當時老臣は總計五名であつたと思ふ。而して内二名は在府他の三名は前記の通り、一名は水戸方面に、他の一名上府中、残る一名は城代であつて老臣の欠員止むを得ないのであつた。

然らば二指揮者中古參者が其指揮權を執れば、責任者が明瞭となる譯であるが、此役敗北の責任者は誰であつたか。當時極りがない様であつた。野州出張のときは、老臣の指揮する二隊であつたから、藩主が無論出馬する筈の處、幼年のため城中に残られた。然らば二老臣中、誰が指揮權を有して居つたか、是亦明瞭でない。指揮權の判然せざりしこと以上の如く、斯くては萬事都合宜しからざりしならん、出張中往々議の合はざりしこともあつたやに聞いて居る。

##### 二、甲 冑

甲冑を實戦に用ひたるは、此下仁田戦鬪が日本で最後の着納めとの話である。思ふに野州小山方面の出兵には、出發の際敵情に於て、甲冑着用を要しなかつたので、士大將以下使

役以上の甲冑は具足櫃の儘、行列中各自の直前は、戰士以下  
の分は長持に收容して、銃器と共に、行列の後方に従へたが  
此役には一回も着用したことなく歸還した、那珂港出征の際  
は甲冑の不便を感じ、具足中必要の分のみ携行した。然るに  
下仁田役に於ては、最初から情況が切迫して居つたため、出  
發の際から着用したのである。斯る危急存亡の場合、勇戦奮  
闘の決心を固め、大いに志氣を鼓舞しなくてはならぬ所か  
ら、老臣の考慮に依つて甲冑に身を固めさせたものと察せら  
る。併し永年の泰平で、甲冑は常に武庫に格納し、俄に之を  
揃へて各人に配當するに方り、大小の不合もあり、破損もあ  
り、着るまでには、非常に時間を費したものだと思はれる。各  
隊の出兵が、案外遅延したのは、無理からぬことであつた。  
又藩士五拾石以上は自分具足を着用する規定であつた。

### 三、兵器の素質

此役で使用した兵器は、大砲は洋式の山砲(丸彈)四門及  
び和式三百匁砲二門であつた。敵は水戸方面にては、大砲十  
五門を有せしも、本役には八門とあり、然らば大砲は彼我大  
して甲乙がなかつた。小銃は、彼は小數の「ケベル」銃(丸  
彈)を持つてゐたが、我は悉く火繩銃であつた。此火繩銃の  
内、足輕と徒士とは、共に三匁五分銃を持ち、戰士は七匁五  
分銃と外に鎗とを所持し、自ら鎗を使用するときは銃を鎗持

に持たす等、場合によつて適宜に之を用ひてゐた。今日より  
想像すれば、不便極まる武器であつたが、當時は已むを得な  
かつたのである。

藩士の使用した鎗は概ね十文字鎗で、流儀は寶藏院流を學  
び、武藝中鎗術は藩士の最も得意とする所にして、可なりの  
達人が多かつた。又和銃には素より照尺の裝置なく、多くは  
手加減で狙を定める爲に、百米突以上の距離では命中が確實  
でなかつた。

### 四、戦闘教練與其他

昔の操練は、練兵場で同じ動作を繰返し行ふのみで、地形  
の利用、敵情の變化に伴ふ臨機の處置などを、訓練したのを  
見たことがない。當時用ひられた甲州流の訓練は、最初集合  
隊形を作り、夫れから行軍隊形に移り、場内一周後、戦闘隊  
形に變換し、先づ左右に位置する大砲を放ち、正面から足輕  
隊が射撃しつゝ前進し、其後から鎗隊が押し出すといふ工合  
で、教練は毎回同じ事の練習で、至つて形式的であつた。下  
仁田の戦闘も右と同様、先づ行軍隊形で進み、次で里見氏邸  
前に陣地を構へて、斯の如く一向地形に頓着しなかつたらし  
い。一体陣地には、攻防共に大概據點なるものがなければな  
らぬ。此據點は當時高崎隊にあつては、彼の左側に接した  
岩下の上の山である。之は第一に先着の足輕隊をして占領さ

せることが必要であつた。然るに此要點を全く放棄した、め  
却つて敵に占領せられ、此山上から眼下に見下ろしつゝ、我  
陣地を射撃するに至つた。是に於て我士卒は全力を盡し、如  
何に勇敢に奮闘するも、據點を彼に占められてから、陣地を  
支ふるに由なく、早くも勝敗の岐るゝ所となつたのである。  
もしも此要點を、敵に先んじて、我軍が占領してゐたならば  
斯くも脆く敗れることはなかつたであらふ。斯る見易き地形  
でありながら、地の利の判斷がつかなかつたことは、洵に殘  
念至極であつた。之れ全く平素から地形應用の操練など、行  
はなかつた爲である。之等は獨り我が藩のみでなく、當時何  
れの藩も概ね同様であつた。然るに水戸藩だけは、烈公が屢  
々野外に大兵を集め、上記の主旨に類する訓練を行ひ、之か  
爲め幕府の嫌疑を受けたといふことを、筆者は聞知して居  
る。斯の如く、此役は彼は平素の訓練と實戰の經驗を有つて  
ゐたが、我れは個人として相當に武術に富んで居つたが、指  
揮用兵術の訓練研究に至つては、遙に及ばざる所があつたと  
言はざるを得なかつた。

今一つ大なる過ちは、寡兵を以てかゝる優勢なる敵の進路  
を遮斷したことで、之は餘り大膽に過ぎた動作である。元來  
寡兵を以て大兵を撃たんとする場合は、側面又は後方から敵  
の不意に出で之を攻撃するがよい、斯くすれば、時宜により

勝算はあるのである。小坂村で敵の進路を眞向ふから遮斷し  
たのは、恰も幕下の小角力が憶面もなく横綱大關に對し正面  
から向ふて忽ち一蹴せられたるに等しくて、正に是れ自ら死  
地に陥つた者と言ふも過言ではあるまい。抑も戦闘は、單に  
勇氣のみでは勝てるものでない。智謀と訓練とが必要なこと  
は、今更喋々する迄もない。此戰に於て我が藩士が各人の行  
動に於ては、數倍の敵を物ともせず、勇猛果敢に奮闘したこ  
とは、眞に武士道の譽れであつて、大いに敬服する所であ  
る。併しながら一隊を率ゐる將帥としては、敵情や地形を知  
察し、或は敵を偽り之を欺き、遂に彼を窮地に陥れ、秘術を  
盡して任務の達成と、勝利の獲得とに努めなくてはならない  
のに、其實施のこゝに至らなかつたのは、是れ則ち泰平の餘  
波の致す所で、獨り高崎藩ばかりでなく、天下一般の趨勢で  
あつた。松本藩(松平丹波守六萬石)と高島藩(諏訪因幡守  
三萬石)とが二藩協力して、彼の有名なる和田峠の嶮岨を扼  
したが、之さへ脆くも敗れたのは誠に憐むべきであつた。

武田勢が水戸方面より、敦賀附近迄、長途の行軍中、沿道  
の諸藩が討伐命令を受けたに拘らず、全然戦闘を行はない藩  
が多かつた。唯高崎藩の下仁田、松本、高島二藩の和田峠の  
戦闘あるのみで、其他は事勿れ主義に出で、後に至り重役が  
切腹したり、或は藩主が閉門謹慎を蒙りし等にて、事濟みと



なりしやうに聞いてゐる。其理由の如何によらず、一般が情弱であつたことが推測されるのである。然るに參百餘名の精銳を水戸方面に出し、城中殘留の老幼を以て編成したる部隊を以て斯く眞面目に勇敢に奮闘した高崎藩の如きは、封建武士の面目を發揮したものである。又上州の八藩に對し、互に協力他領迄進入追討すべく、嚴重なる合同命令が幕府出先官より下つたので、小幡、七日市の二藩は、前記の通り一ノ宮の軍議に列したが他の藩は、遂に参加しなかつた。是等不參の五藩は、終局後如何に處分せられしか、之を聞き漏らしたの遺憾であつた。

餘録中今一つ、記上すべきものがある、夫れは幕府の討伐總督田沼玄蕃頭（若年寄遠州相良の城主（一萬石）の位置である。彼は何れにあつて命令を下して居つたか不明である。聞く所に依れば、彼は敵軍より概ね一日行程位隔て、宿陣し飛脚を以て諸方へ命令を下し、或は探偵を出して敵情を搜索し、且つ各藩の行動に注意してゐたと言ふことであるが、其場所は常に秘密であつた。偶々高崎藩へ命令下達の際其末文に『若し賊徒押し來り候節手餘り候らば高崎宿に歩兵隊宿陣致置候間援兵可申遣』とあり。之に依つて考ふれば、此隊は田沼の護衛兵にて、或は一二中隊位のものならん。此隊は敵より離隔して居たことは確實である。即ち田沼は此歩兵隊

の蔭に潜んで居つたものと思はる。元來指揮官は戰場近く進み、手裡の歩兵隊を以て藩兵を援助し、或は其行動を監督したならば、各藩の士氣も大に振ひ、連繫上の便宜をも獲得したであらうに、之等の點を缺いたのは眞に遺憾であつたと思ふ。

#### 五、戰士の餘榮

此時代の武士の教育として、個人の武術に就ては、其階級相當の武藝を心得ない者はなかつた。併し戰術に至つては、全く形式的に之を訓練するだけであつた。其理由は、銃器よりも刀鎗が主なる武器であつたから、地形の應用などは概して其必要なく、唯々武藝（弓馬鎗劍）に熟達し、誠忠勇武の武士ならば、實に天晴なものであつた。此戰鬪に従事した諸君は、國家の爲に身を犠牲に供し、武士の本分たる誠忠を盡され、藩士の龜鑑となつた人々で、幕府より行賞があり、且つ主君よりは家格を進め家祿を増加せられ、夫々賞與を授けられた。又會津藩では、此役の戦死者が、十五歳以上二十歳迄のところ比較的多きに鑑み、少年教育の儀表とせられたといふ、眞偽素より確かでないが、さもありさうに思はれる。尙此戦役後五六年間は、高崎藩廳に於て、年々同地大梁寺で立派に供養せられたが、廢藩と同時に沙汰止みとなつたと『高崎藩近世史略』に記載されてある。時世の變遷浮沈は

常なきものとは申しながら、曾て賊徒と呼ばれた武田耕雲齋は、畏くも位階追贈の聖恩を辱ふし、加之護國の神として靖國神社に合祀せられ、青史之を千載に傳ふるに反し、當時國家の爲に身命を抛ち、數倍の大敵に向つて勇戦奮闘、遂に名譽の戦死を遂げた高崎藩の戦士は、今や時人に忘れられんとし、或は其遺族さへも、年と共に煙滅せんとしつゝある如く、史を繕いて讀誦茲に至り、誰か一掬の涙を灑いで、是等戦士の忠魂を弔はないものがあらうか。靜かに瞑目して七十餘年の既往を回顧すれば、波瀾重疊の跡、さながら夢幻の郷を辿る如く、萬感交々胸奥に湧いて眞に無量である。遮莫至誠は永く草莽に埋まるべくもなく、妾に觀音山清水寺の住職か、疾くより戦死者の木像堂を設けて、其英靈を祭り、又下仁田の下小坂村里見家始め同村有志者の戦死者記念碑の保管並に年々の祭典供養等、頗る手厚く取り營まれるのは、舊高崎藩士として眞に感謝に堪へざるところである。尙今回扇光會並に温故會の會則中に、英靈に對する永久年回供養等につき、特記せられたことは、我輩舊藩士一同誠に本懐とする所で、感謝と感涙を禁じ得ない次第である。序ながら諸賢の諒承を得ると同時に、以上縷説の愚見に就いても、亦御批評を賜はらば幸甚である。

#### 参 考 書

- 一、下仁田戦争記 深井景員君著
- 一、武田耕雲齋と日本の武士道 齋藤平治郎君著
- 一、高崎藩近世史略 原教君著
- 一、筑波派遣中日記 寺田五右衛門君著
- 一、高崎藩士實戦者の實戦談

以上

